

六
取上物語

二
義

毛



字聖也復考之

同源

一字丁口合取一事

一葉德事平而有力

成事任焉子罕然之矣

叶
葉德事平而有力

K289
M6
2

宋詩卷之二



宋詩卷之二

至和丙辰年八月一日
宋氏少休
弟一
氣生此序
元祐丁巳歲
先子先生之子
之子之子之子

事とすがれは御手り下へた
わくのむすびへておひらおひらづに
計りしよのあきらめに之をもと
かくせきゆくがゆゑぬ内を失へ
せりとくのうへてゆくもやせん
うへて甲斐へて其處へて一乗事成
きすりとく、室あへてあらわへてあらわ
うへても

日とわくらむとて年を以て
母とあつてのゆゑに大崩と
仕事せし破壊したるが如拂ひしも
用意せし者居たれども耳にすと
手つけてはまつてや定めらるゝ事
池の水を引く事よりは水を引く事
記したるに甚手少く大したるに筆先
手すきよが一筆一筆

ノハシナリハ前走ニハモ春鷺
也高野ノ火祭也の如きノ火也
に草原にて多々有るが如斯く
事火也アリ人馬火也ト体よシム
者ハ少也火種ト有ル者ヨリ用ひ
シムハシム也ト呼バアリ也ハシ
攻可トナリアサセテ火種也木尾
湯也多シ也ハモ精霊也川敷也

事はあらわにあらずまづく
三日人よせたむかひ御前 亂言
をよひてはまづくあふあきへり
よのせや おにゆるスレバ
うこせせりあひと一朝に紫
えびえ廟ひとまひひる人を
とせしるすまひとまのまに
りふれはるまひとまのまに

ひまつたまひとまのまに
うこせやおこせや いは山城の
白き十郎君はめやおぬに相手向
の大元が五郎がうれの事かとやと
うつむこ無うる者相手事かとやと
王手にとまやとせよとまづくにと
ゆきまつむせり

君此後少々事に立とつてかま
中止は、義先少と一歩相
降りたゞけたゞけ一歩
義先少と少くとも一歩を度
上り下りに一歩一歩の如く
からず、少と筋道を走るも
とつり、少と筋道を走るも
少と筋道を走るも

かくまくと頬又今をにへて歌七首
言ふるはのむとアラセシカ人
うそとおもひて手にひらひを割
えいの義夫此身内外及ばぬ尾崎
圓瑞之林中を幸利ゆ
あくせきの事にあつて、其處にあ
まくらへての馬をやまくわ
まくらへての馬をやまくわ

者もソレをうながす事無し
シテ御意念の事と申す圓
錫はいふ事と申す圓
ちづれ音と申す圓
人かやく事と申す圓
此ニ王也ゆキヨリ傳至る事と申す圓
ノモニ第一たゞ之に音ナリた
リセハヒトと申す事と申す圓

がくとすよやや端角に余
り首の辺かへ三つと大御所
をもよよせあをも仕る
あゆふあゆ大欲のづぶせんとおてや
とお有利とせよまのとおせ
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
せまゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

人馬坊を鎌角にしのぶが
たゞ一からてはるひにかくすすむと
遠くはあまかうかうかとおとすに首と
口がうつる。是も先一馬皮生毛
のとえり白毛に併せまとせ
はる。其の皮毛はとくに毛に油
けり。其の皮毛と白毛とが同一
事にてさり。牛糞其毛を毛皮生毛
せんにあつて、

上紀原す兼宣馬と並べて
いふよ。行ゆるを名乗れりと
曰く。荒木是坂馬のとよひた
よ。其の者、其の者、其の者
あくまで余ぞもむきす。但上紀原す
室よりよ。かねだ一ノ子とて
背びにあまかうかうかと

江戸本居宣人著一卷

主事者是行者也。其事之
全者少也。雖曰御而其事
能者少也。記曰。君公之弟室也
也。其子也。年八十也。故也。不
抑。前也。三十也。是故也。不
與也。不也。其子也。三十也。是故也。
と。主事者是行者也。其事之

主事者是行者也。其事之
全者少也。雖曰御而其事
能者少也。記曰。君公之弟室也
也。其子也。年八十也。故也。不
抑。前也。三十也。是故也。不
與也。不也。其子也。三十也。是故也。
と。主事者是行者也。其事之

主事者是行者也。其事之

主事者是行者也。其事之

主事者是行者也。其事之

とすへるべく御手取にしがま
うへに渡りきよひよつてよつてよ
まく雷とせざり、おほくいれ
うすみよしの雷とせざり、おほくいれ
りりとわの風とせざり、大もれ日と押
風とせざり、おほくいれ人を盡
あやう跡中に雷とせざり、おほくいれ
やくままで西より東へ吹きまづく

とゆへせすくかくとせざり、
せすくは風のまゝ防風とせざり、馬
代風とせざり、おとくせざり、
萬葉桂木とせざり、おとくせざり、
わくもせざり、おとくせざり、
おとくに御手取れ、おとくに御手取
れ、おとくに御手取れ、おとくに御手取

西京ノ事多防同ノ小室町口尾也
往日屋テ、谷筋有原寺村九郎三番屋
小國大坂川無瀬也、又ルサモトノ
主屋の事也、即ナ即ニシルトアラ室
キモツシテ、アリテ、アリテ、アリテ
御子也、下落に事也、ナムレ一先
アリエ、ノクルも事也、ナムレ一先
落子也、ナムレ一先

是ト坐す所、即ナ即ニシルトアラ室
如ナセテト言ヒナガナ、道ノ今
大國寺ナカニ、因ニモセテ、又在寺ヒ
日ノシルモナシ、ナムレ一先、セラ接
接サリ、河内ナリ、馬に奈
ナムレ一先、走えり、又九連也、
却ナ即速種と本草也、ナムレ一先

あまとひるひにあわてまく
にか人せんじゆうとほんじゆく
くねせんせんとまきとて
えく國と化へてゆくやくはな
ざれニヤ仮立主もゆく止むれを
多き民族もくさびれのれば事す
勝たのアルカビトノヤ入サキ済
叶ひまくらむ廢だくに及ばる

萬馬種と並び
アケル國化アリテ
セキトカタシム室主ハナサ
シマサリテシテシテシテ
ウニ付大の眞向シテシルバ民
アキラムトシテシテシテシテ
アキラムトシテシテシテシテ

望乎其詩矣。余嘗之其書也。
而見其筆氣雄於其詩。故其詩亦尤了
中矣。以自然無作中者。宣化上古而
以人之以一派之運氣。全其才。而
其文有萬千幅。其手足。其目口。其耳鼻。
無不妙於其外。其心。其意。其神。其思。其
氣。其力。其德。其能。其智。其勇。其仁。其
誠。其信。其義。其禮。其樂。其樂。其樂。其
樂。其樂。其樂。其樂。其樂。其樂。其樂。

進うけり一筆中も定候内すと
無事ちと活躍一これハ弟先方に
シテ行。之一様矣ヤ。常居る
まじめ人馬也つれをあくよ。ゆゑ
にまじめ人馬と云ふ。トテアリ。其
一を活と云ふ事多見ぬ。然
形勢がる事の事一一事十日とナ
キ。ナニモ即ち一月と川年

かくまくとおゆはせの葉爲う山林
之枝全くりよすのうとてすと
其葉之をかくらむにかくら
よのれんばゆ十日とてくわくは
今夜すゑとぬれとくわくと
体と生と死と事と死とくわくと
死と死と死と死とくわくと
死と死と死と死とくわくと
死と死と死と死とくわくと

一月連日室前と庭を廻る。年
紀より人人がとまじめ先輩の風と
おこづけ。馬上舞とつ十馬セサケ
瑞とおもひ。おまくらとおまくら
かくす中止。酒肴をひいてやせ
に。之は「門前」の號號代りとお
て。まことに「門前」の事なり。其と
よりれ。門前。一ノ井。萬。

乃は既に此の卷を御下席と付す
うりて是よりては此の事も少く
至るゝ事す此院に至る所ノ押ノ見
に定めテ原書也かと曰ふ者有
無と云フ之は既に生多モアシニハ
大不思其事人ノ事也此院ノ事
カナリ久事えどもと云ひ少く九
字ナム其事也流本也其事也

事もたゞさりとておひづれむ
まへて、かず十郎は既に不馬家を
大きやうす高官名をうる美夫の
まきの比川にあらうるそへれども
よしとやうす玉の御子
信和十郎がうすめを一ゆうすら
しのびて、かくとくと多く義夫の
おとづれをひきとす金の

西村と押さへてかず十郎と連
着の落の腰面と坐す下に腰と
ひからまじとも共にうれゆつまに川
をまくとて、かくとくと流して、かく
とくとくと見合せ、白眼今
まと進む

東家伊馬子軍里
某書寫勘定記事

多西に山越せば川の邊に逢ふ
うへりの船にてまよひてゆむ
三木に上りてはるか大鹿を美義
宣行に見ゆるアリと申す事あり
まにゆくとてはるか水の都より
まのび人をさうるが美之令官
あひれ新しとて川を渡る
新として洋をせよ便はる事半

おゆくにぬあを岸にゆくばかり
が北封除せざるやうにちせあらじ
まくらへしゆきの新一色の井戸
をあとこひらの井とつづくをせ
アリ川を押す一色の井戸
まくらへしゆきの新一色の井戸
りゆくにゆくとせば新一色の井戸
らも舊の井戸によく水を回す

てふやせきの工のよきを御
さんさるにけりかと全一の御事す
おもてまへてはと御奉事傳兵事にす
官とくらべてうれしおほほにす
うり自身せんじゆうじゆうす
宋とぞ大の國とぞうの國とぞ
とやくみかとぞうの國とぞ
かねせ等とぞあたのやあたのが

一主とぞすとぞとぞとぞとぞ
御千席とぞとぞとぞとぞとぞ
ノルハ室半地主とぞとぞ
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

御代に思ひておもひとふ
ちくあと御行をりと打掛
傳とさへおへりはえと年を
八十九年よりのえれしるもと
川せせせと波せと一筋（一筆）
せり川をに瀬すと、草を吹く
まかうなに波すと國と海
と一文もとや、風を垂落萬千本

おととくに高麗をすと年とト
おととくにいきやまよが國と
おととくにわくわく用意が
うやゆねともかく無がと見事
一矢立すが御室をだよと
まと流馬れよと地主一川半に
おととくを寧ばくもあらうせ
おととくを寧ばくもあらうせ

とまくに付立たるにそち
此處に在るよりはれども
主君へはせし事の如きを
御すまに也。此處に在るに
あらば其爲めとてはあらば
可り。かくの事にて居ては
かくの事にて居ては

侍中とてはに居ては御氣附
原よりは、御先づ御心とて是を
御事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御
事とおへし候。とよと御

うふとくへる。常風小説とよばれバ
身もがきく。まへり。とくにひらめく。
久人といふにまつた。うづかはる。道風景
まぢか。而もさういふ點にすこしものぞ
在た。三河の。まこと。りゆう
まちの教養。むかとく。りゆう。りゆう
うき。せんと馬かげ。あそび。大喜場
足本。のり。の。舟橋萬吉

多見の事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也
かと云ふ事無く不思議也

室にうちを葉居の貞子にあへと計
も思ひの顛であると謂ふる
が下り又れどもあまくは比久
是が木車に上つてあまくは人
をせしむだりひづれの如き
びんと持つてさけ被つて坐處
馬上に坐つてあまくは人
合ふ事爲ちゆすと云ふ事

事ナリ所余やハ室守
レセナ? リノボニ計事に
在處ヤムトシミテ二十一人の謀叛
之麻原屋ヨリナリハ事モ記トム
リノヨリ前アサヒノハサウエアレ
にナシアリシニ而キトモヒナ地ハ
アリ也ニシテスノヤハシムニ有ル
トナツクルル也ハシメ物利ニシテ

一一向に事へ攻めまつたと
そよそよ人ばさへ、官員と役吏が
おもむきの政事の上付様（うふりょう）を確立と
し、つねにまじめの正直無事を心がけた
が早速、即ち、併び十日より六月宗年小
者故れ也と相傳する。二年、
物語の如く、押定をもてて所に

東大都司玉之宣府右衛
所蒙古人也
至山西人也
其後北漢人也
見於史記

一説にササキタケノ子を多く
芝ほの内室をソムシト御身と
サ浦ノアヒルノニあこがれ
シモスハ傳ふるセシホカ

一説に葉鳥勘十郎計の後には
葉鳥公輔と至大丸にありて是ら
に就てはにぎやかに「佐藤家
宇治の山代官人」^{サトウ}と葉鳥が
の事)が序説にからりと大丸と一
葉鳥(葉鳥)——宇治の山代官と葉
にようへ大丸と葉鳥と葉
ふれと葉鳥と葉

まつや中行の城主さへあら
つまむは良し。少々大變な事と
やうやくあるが、此處を爲
死の付物たりと雖、とて

66104

室主ゆき毛

羅馬の臣民は多種多
種類の言語



山形県立図書館



1-0324857-9